

どこで変わる？

校 長 武井 正明

先日の本欄「後悔先に立たず」を読まれた方から、
「なぜ、そんなにひねくれている、嫌われ者だった校長先生が、どこでどう改心したのか、その続きが読みたくなりました」と訊かれて、自分の分岐点を振り返っています。

「自分の歩んできた人生で消し去りたい時代がある」というのは実に悲しく、残念なことです。でも過去は消せないし、もう二度とやり直せない。

自分の人生の大半は、劣等感しかなかったような気がします。

自分より成績のいいヤツを羨む。自分より金持ちの家庭に憧れる。異性にモテるヤツに嫉妬する。それなのに自分には「実力で勝負する」自信はありません。

それを努力して克服することができない人間はどうするか。答えは簡単。人を穴に突き落とすことで結果自分が浮き上がるという、最も姑息で卑怯な手段です。

でもそんなことを繰り返していると、信用できる友達はどんどん離れていきます。そして最終的には足の引っ張り合い、落とし合いをするような関係しか残りません。その段階になると、実は周囲から距離を置かれ、軽蔑されていることに、悲しいかな当の本人は気づいていないものなのです。

私がこれまで関わってきた数えきれない子どもたちの中にも、当時の自分と同じ眼をした中学生がいました。その時思ったものです。

「他の先生の眼はごまかせても、俺の眼はごまかせないぞ。お前も俺と同じだから…」

私は人間の性根など、そう簡単に変わることはできないと思っています。

だから「自分は欠陥の多い人間だ」と自戒する習慣が身に付いています。全面的に自分自身を信用していません。勿論「自分の考えが常に正しい」とも全く思っていません。自分の考えが「それで正しいのか」いつも疑ってかかっています。

ここまで書いて自分がどこでどう「改心」したのか、明確な時期はわかりません。

ただ、このままではロクな人生にならないぞ、と焦燥感を抱いたのは高校から大学2年あたりの時代だった記憶があります。

その時、自分自身を諦めなくて、見捨てなくて本当によかったです。

だから何度も吉中生に言いたいのです。

自分を偽るな。ごまかすな。諦めるな。自分で切り拓け。人が嫌がることはするな。

そういう姿勢で生きていれば、きっと人に恵まれた、豊かな人生を送ることが出来ます。今からでもいい。すぐ変わらなさい。必ず変われます。明日から人生が変わるぞ。